

ローハン・マックウイリアム著
(松塚俊三訳)

『一九世紀イギリスの民衆と政治文化』

——ホズボーム・トムソン・修正主義をめぐって——

本書はRohan McWilliam, *Popular Politics in Nineteenth-Century England* (New York: Routledge, 1998) の邦訳である。著者のマックウイリアムはアングリア・ポリテクニク・ユニヴァーシティに所属する研究者であるが、日本ではあまりなじみがない存在だろう。

本書は八章で構成されており、第一章でキャロライン王妃事件の再検討を行うことから始められる。ここでは従来の研究が事件に対する階級的な反応に関心を向けていたのに対して、最近の研究が事件それ自体に関心をむけ、事件をめぐる民衆の「心のありよう」に注目するようになってきていると論じられている。

こうした研究史上の変化は、第二章で改めてイギリス近代史の研究史を概観することによってより明確に示される。著者はホズボームやトムソンらの研究を「旧説」

(Old Analysis) とした上で、「階級と文化、共同体に強調点において」「民衆の政治」を見ようとする試みであった」としている。ただ、「旧説」は文化を強調しつつも、階級と階級意識を切り離せないものと考えられるが故に、労働者階級を美化する傾向があると指摘する。これに対して、一九八〇年代以降のステッドマン・ジョーンズに代表される「修正主義」(Revisionism)の研究は、「旧説」が前提としていた「自立的な労働者階級の文化」に懐疑を示していることが指摘される。「修正主義」は「旧説」の社会経済的な要素を強調している点を批判した上で、「民衆の政治」における言語や観念・文化を「長い一八世紀」との連続性の中で捉えようとする傾向があると著者は述べている。

更に第三・四章において著者は、「修正主義」の成果を参考にしつつ、社会構造と政治的イデオロギーに落差を認めた上で、経済よりも政治が作り出す変化に着目する、「政体を中心とする」(polity-centred)アプローチに従って一九世紀のイギリス社会を再考していく事を表明している。つまり、国家や政党などの様々なカテゴリーに焦点

を当てる事で、一九世紀の「民衆の政治」を複合的な「物語」言説」として分析していくという著者の研究のスタンスが示されるのである。

そして具体的には、第五・六章でポピュリズムやジェンダー・社会主義に焦点を当てて一九世紀前半の民衆の急進主義が、第七・八章でネイションに焦点を当てて民衆の愛国主義・保守主義が分析の対象となっている。主に言説に着目した分析を通して著者は、一八・一九世紀のイギリスの政治文化を貫くイングリッシュネスの神話を賛美する姿勢を指摘すると共に、単純に階級に還元されない「民衆の政治」の複合的・重層的な性格を明らかにしていく。

ただし結論の中で、今後の「ポスト修正主義」の研究の課題として、従来の「修正主義」が曖昧に扱ってきた階級により関心を向ける必要性があると論じられている。もちろん「旧説」の様に階級を自明の前提とすることはできないが、ジェンダーやネイションと同様に「民衆の政治」を形成する重要なカテゴリーの一つとして階級にも焦点を当てることで、より重層的な政治の社会史を構築する必要があると主張してい

るのである。階級の言説が一九世紀のイギリス社会に与えた影響力の大きさを考慮してみても、この著者の主張は真摯に受け止められるべきであらう。

以上本書の内容を概観してきたが、著者が主張する政治文化に着目した研究は、近年イギリスのみならず日本でも研究が進んでいる。ただ本書はイギリス近代史における「修正主義」の成果を包括的に整理し、更にはそこに潜む問題を提起したという点で非常に大きな意義を持っている。

なお訳者の松塚俊三氏は一九世紀のイギリス社会における急進主義や民衆教育・民衆宗教を分析した論考を多数著わしている。著者と専門領域が極めて近く、そのため非常に丹念な訳出がなされている事に加えて、的確な訳者解題が付されているので、近代イギリス史の専門研究者のみならず、初学者にとっても非常に有益な一冊であると言えるだろう。

(A5版 二四四頁 二〇〇四年十月)

昭和堂 税別二四〇〇円)

(藤井翔太 京都大学大学院文学研究科修士課程)

染田秀藤・篠原愛人監修

〔大阪外国語大学ラテンアメリカ史研究会訳〕

『ラテンアメリカの歴史』

——史料から読み解く植民地時代——

一九八〇年の日本ラテンアメリカ学会創設以来、日本においても、ラテンアメリカという地域が北アメリカから切り離された独自の研究領域として認識されるようになった。近年では、考古学、文化人類学、政治学、経済学など様々なアプローチから、ラテンアメリカについての豊かな研究成果がもたらされている。しかし、このような状況の中でも、ラテンアメリカ「史」研究はいまだ立ち遅れており、史料と向き合った本格的な歴史研究の事例は、多くはない。ラテンアメリカ史は、西洋史の一分野に位置付けられながらも、ヨーロッパを土壤として培われてきた歴史概念では読み解くことのできない、独特の歴史環境を有しているからである。

こうした現状を打開し「ラテンアメリカ史研究の裾野」を広げるためには、日本に

おいても容易に史料を利用できるようにする必要があろう。この思いを持って、これまでラテンアメリカ史研究をリードしてきた染田秀藤氏、篠原愛人氏らは大阪外国語大学ラテンアメリカ史研究会を発足させた。本書は、そのメンバーによって訳出、編纂された、本邦初のラテンアメリカ史料集である。

本書は、時代順に並べられた全三章から成る。また、第二、第三章では、各々五および七の節が立てられている。以下、本書の構成に即しその内容を紹介したい。

第一章「先スペイン期」では、先住民が自らの過去について、スペイン人到来以後に記した土着史料が所収されている。この章は、他の章に比べると紙幅が割かれていない。しかし、それらの史料からは、ヨーロッパ人側の記録文書のみには依拠してきた従来の研究が明らかにしてこなかった先住民の精神世界、歴史観を読み解くことができる。

第二章「発見・征服時代」では、条約や王令、報告書などが所収されている。その中にはベタンソス「インカ史総説」を始めとして、その重要性が指摘されているながら